

世界の子育て紹介 リッチモンドだより 第10回

カナダ・BC州の早期教育事情

日本語プレイグループ「宝島」

徳川 香世

子どもの能力をできるだけ伸ばしてあげたい、と思うのが万国共通の親心というもの。でも、できるだけ早い時期から英才教育をするのが果たして子どもにとっていいのか、悪いのかについてはいろいろな意見があると思います。今回は、カナダのBC州における早期教育の現状を、私の個人的な視点でレポートしてみたいと思います。

カナダの幼稚園(プリスクール)

カナダのBC州では、子どもが3歳になる年の9月に、いわゆる日本の幼稚園とよく似たプリスクールというところに通い始めるケースが一般的です。BC州では、5歳になる年から公立小学校に通い始めます。なので、プリスクールには、3歳児クラスと4歳児クラスがあります。でも、日本の幼稚園と比べると、カナダの子どもがプリスクールに行く日数も時間数もとても短いと思います。

モンテソリーや一部の私立のプリスクールを除けば、3歳児は週に2回、4歳児は週に3回、1日2・3時間が一般的です。毎日通うモンテソリーや私立のプリスクールでさえも、日本の多くの幼稚園のように、お昼も食べて帰ってくるというケースはあまり聞きません。

日本のいわゆる年長さんにあたる小学校のキンダーガーデン・クラスから、一日6時間のフルデー教育が始まります。これも、BC州では去年まで、3時間弱の半日プログラムでした。今年になってから法律が変わり、1日になったんですが、私なんかは「やっと1日になった!」という感じなのに、地元のお母さん達に意見を聞いてみると、みんながみんな手放しで喜んでる訳ではないのには驚きました。「1日中、学校にいるのは、まだ早いわよ。まだ5歳なのに…」という意見をよく聞きます。



小学校低学年で何を学ぶ???

授業の内容も、プリスクールはもちろん、小学校のキンダーガーデンになってもまだまだ遊びを中心としたプレイベースのプログラムが主体です。私の長男が小学校に入って驚いたのは、1・2年生あるいは3年生ぐらいまで、学校の教室にレゴのブロックやゲームなどのおもちゃが置いてあることです。日本では、小学校1年生になった瞬間に、小学校は「勉強」する所で遊ぶ所ではない、といった観念が強くなりますよね?でも、カナダでは、3年生までは「プライマリー・イヤー」といって、まだまだ遊びを通して何かを学ぶといった考え方が強い気がします。

算数といった教科でも、1年生の時から、 $1+1=2$ といったドリルをこなす作業を主体とする

のではなく、ブロックを使ってパターンを見つけ出す、あるいは自分でパターンを作るといった作業を通して、自分で考える力をつけていくという教育理念が主体です。反対に言えば、フラッシュカードやドリルを使った「早期教育」はあまり一般的ではありません。

でも、こういった教育理念を、親がどう受け止めるかは千差万別です。カナダは、移民も多い多民族国家の国。親はそれぞれ、自分が受けた教育を物差しにして、子どもが受けている教育を評価しがちです。なので、アジアで教育を受けた日本人や中国人の親にしてみれば、カナダの小学校、特に低学年は、「勉強」じゃなくて「お遊び」ばかり、といった印象を持っている人が多いような気がします。

カナダには、日本のいわゆる進学のための「進学塾」はありません。ですが、私たちの住むBC州には、KUMONも何校もあります。高学年になって算数や読み書きに遅れが見えてきた場合などに、親が通わせるケースが多いようです。また、アジア系の親は教育熱心なので、学校が終わった後にピアノやバイオリンの音楽教室に通わせたり、算数の塾に入れたり、いろんなアクティビティーが盛りだくさんで学校が終わった後も大忙しの子どもたちも確かにいます。

のびのび教育の成果?

私が、カナダで子育てをしていて一番いいと思うのは、子どもがのびのびと成長しやすい環境が整っているなと思うことです。個人的に、小学校の低学年では、学校が、そして学ぶことが楽しい、という姿勢や態度を培ってくれればいいな、と思うのです。

小さい頃から「のびのび教育」の成果かどうかはわかりませんが、カナダの中高生を教えていて思うのは、子どもらしさを持続している生徒が多い、そして、学ぶことを楽しいと思える生徒が多い、ということ。例えば、高校2・3年生になっても、授業でゲームなどをすると本気でおもしろがって乗ってきます。日本の高校で先生をしていた人に聞いてみると、そんなことは日本では考えられないとか…。日本の高校生はどこかさめていて、授業でゲームなどを取り入れたら、しらけてしまうのが目に見えている、とのことでした。あまり、「勉強!勉強!」と成果主義になると、学ぶことがあまり楽しくなくなってしまうのかもしれない。

日本では日の目を見なかった「のびのび教育」。受け止め方はいろいろあるものの、カナダでは、それが主流だといえるかもしれません。